

ロレンスのトラベルライティング

——『海とサルデニア』の場合——

石原 浩澄

はじめに ——問題設定とこれまでの議論——

ポストコロニアリズムの視座が文学批評に導入されて以来、文学テキストの生産と植民地支配勢力とのある種の共犯関係を究明するような作業が可能となった。植民地支配を促しあるいは正当化するようなコロニアル言説としての様々なテキストに焦点があてられるようになったのである。植民地支配の主たる勢力である西欧列強にとって、その地理的外部に属する土地や人々についての記述は単なるエキゾチックな異郷への関心を喚起するにとどまらず、「啓蒙」や「文明化」の名のもとに、進出・支配を正当化するために巧妙に利用されることもあった。フィクションとして小説などに描かれる異郷もあれば、探検家や様々な分野の研究者が描きレポートする土地もあった。文学者によるものにしろ、行政官や学者のレポートにしろ、未知の土地の様子を記録し伝える旅行記は、このような記述の典型的なものである。今日の批評状況に鑑みて Musgrove は次のように述べる。

[It] is virtually impossible to consider travel writing outside the frame of post-colonialism. In many cases now, travel is regarded as a sub-story of the grand narrative of imperialism. (32)

ヨーロッパにとって未知の領域を記録し、ヨーロッパによる介入の可能性や啓蒙の必要性を示唆するような旅行記を、帝国主義的拡張というグ

ランドナラティブを補足するような語りとしてとらえる潮流は、今日の文化・文学研究の大きな特徴のひとつとなっている。したがって、「旅行記は知と権力の要請（imperatives）が相互構成的に交わる言説として理解される必要がある」（Dissanayake & Wickramagamage, 7）というような発言もなされる。

このように、帝国主義的他者支配の権力と密接に関連する、いわゆるコロニアル言説として旅行記を読み返す動きがあることを確認したが、こうした言説の特徴に関する発言も見ておこう。E・サイードの『オリエンタリズム』を植民地支配研究の新局面を開いた決定的な著作のひとつとしてとらえるアーニャ・ルーンバは次のように述べている。

ヨーロッパの文学テキスト、旅行記その他の著作で「オリент」が表象されているのだが、それがヨーロッパとその「他者」とのあいだの二項対立を生みだした。このヨーロッパとその「他者」とのあいだの二項対立こそが、ヨーロッパの他者の土地に対する覇権を維持し、それを拡大するのに役立った。そればかりでなく、ヨーロッパ文化を創出するためにも中心的な役割を果たしたのが、ヨーロッパとその「他者」とのあいだの二項対立なのである。（67）

この後でルーンバはサイードの研究が様々に批判されていることを紹介しながら、植民地言説研究におけるサイードの位置を相対化するのだが、植民地（コロニアル）言説を、ヨーロッパとその他者を二項対立的に定位しようとするもの、非ヨーロッパを「差異化」あるいは「他者化」し、ヨーロッパのアイデンティティ、そして優位性を確立しようとする言説であるということはルーンバひとりに限らず広く受け入れられているようだ。

小論の分析対象はロレンス（D.H.Lawrence）の旅行記『海とサルデニア』（*Sea and Sardinia*, 1923）である。「小説家」として認識されること

のほうが多いと思われるロレンスだが、彼は4編の旅行記を残している。
 “The period from 1880 to 1940 was the heyday of the British Empire, and much travel writing shows the complicity with imperialism” (71)
 というHelen Carrの言を待つまでもなく、ロレンスが旅の記録を残した
 1910年代、20年代という時代は、おおざっぱな言い方だが、まさに帝国
 主義の時代と重なっていると言えよう。われわれはロレンスの旅のテク
 ストをどう位置づけることができるであろうか。ヨーロッパ植民地主義
 の対象となったアジア、アフリカ、南米などの地域と同じように考える
 ことはできないが、イタリアの辺境に位置するサルデニア島への旅を記
 した旅行記は、コロニアル言説から全く自由なのであるだろうか。大英帝国
 繁栄の時代にロレンスを置きながらも、先述のCarrは、「彼 [ロレンス]
 の旅は情熱的な疑似未開探究 [quasi-primitivist quest] に鼓舞されてい
 た。真正で簡素で、より激しい存在のあり方を彼は求めた。・・・彼は
 訪れた人々の純粋なエッセンスを探し求めたのだ」(83)と述べるように、
 ロレンスが語られる場合、未開へ向けられた彼の視線は、西洋批判を裏
 返したプリミティヴィズムという取り上げられ方をされることが多く、
 コロニアルリストの視線につなげられることは少ないのではなかろうか。
 以下では、これまでの『海とサルデニア』批評のいくつかに目を通すこ
 とにより、その特徴点を確認する作業をしながら、小論の方向性を提示
 してみたいと思う。

Tracy, Jr. (1983)は、作家自身を語るものとして『海とサルデニア』に
 注目している。ロレンスの他の旅行記と比べても『海とサルデニア』に
 は民族誌的要素も薄く、読者が知るのは作家の「魂の状態」であるとい
 う。したがって作家がサルデニアには文化や歴史が欠如していると語る
 のは、作家が自らの過去から逃避したかった結果であるとTracyは解釈し
 ている。サルデニアについての歴史記述を抑制し、そこを「有史以前」
 と規定し、「未知」(unknown)という特徴を付与することによって、ロ

レンスは当地に魂を解放する場を見出したのだと述べるTracyは、サルデニアの風景は作家の内的風景に呼応しているという。たとえば、作家の虚無的な心理状態が、サルデニアを「世界の果て」の不毛の地とみなす表象に反映されている、という具合だ。ただしこの「世界の果て」(end of the world)という表現も「ことばのあや＝比喩表現」(figure of speech)として解釈するTracyは、テキストの言語表現・修辞表現を重視する審美的な(aesthetic)見解をとっているように思われる。

このようにテキストの文学性や美的側面に注目する議論は、形を変えながらも『海とサルデニア』批評の特徴のひとつとして見受けられるものである。Janik (1981) は、現在時制を多用した日記風のスタイルに着目し、作者ロレンスが率直に表現されたテキストとして『海とサルデニア』を捉えている。Janikは「男性的社会の探求」と「ヨーロッパ的モダニティからの逃避」(48)という点を『海とサルデニア』の2つの主題として考える。「探求」と「逃避」という行為の性格によるところが大きいのかもしれないが、Janikは「期待」と「幻滅」のパターンを『海とサルデニア』に特徴的なものとして読み取っている。一方でこのようなロレンスのサルデニア描写の特徴を述べながら、ロレンス自身が他者にどのような印象を与えるかについて敏感であるということ、さらには自らが他者によって戯画化されることにいらだっている点などを指摘していて興味深いのだが、一般的にJanikの論文はロレンスが何を描いたのか、果してそれが現実的か否か、という議論にとどまっており、ロレンスがどのように語ったことの意味を議論するには至っていない。

Aldington, Burgess, C. James など、ロレンスの旅行記に肯定的な評価を下す批評家に対して、そのような読みはロレンスの旅行記の暗く絶望的なトーンを無視している、と反論しているのは J. Meyers (1982) である。この方向から『海とサルデニア』を読むMeyers は、『海とサルデニア』は旅の不快さを率直に記録したものだと言う。失われた過去への

ノスタルジアを抱き、「遠くの土地」(remote place)にあこがれ、「機械的な同一性」(mechanical oneness)とは異なる「土地の精神」(spirit of place)が存在すると期待してサルデニアへと旅をするロレンスの期待は、訪ねる町ごとに失望に終わる。『海とサルデニア』における旅人は「犠牲者」であり、苦しみが旅の経験を確認する。Meyersにとって『海とサルデニア』はあくまでもロレンスの幻滅の率直な記録なのである。Meyersは苦しみがサルデニアの旅の基調であり、期待と失望が構成パターンであるという具合に、彼の論文のタイトル——“The Aesthetics of Travel”——も示すように、サルデニアの旅を審美的な視点から読んでい

る。旅人の期待と失望の源泉や意味を問うことはない。

審美的視点からの論評は続く。ロマンチズム以降、現実世界においていかに秩序と美を回復するかが時代の問題となっていたと指摘する Charisse Gendron (1982) は、『海とサルデニア』のロレンスはその「回復された領域」(restored realm)を特定の時空から独立したものとして想定し、「逃避行為」のなかに位置づけていると述べている(220頁参照)。現実の旅が問題解決をすることはないが、旅の比喩は想像上の欲望充足をもたらすとロレンスは認識していたのだというGendronは、『海とサルデニア』の主題を「欲望の欠如の美的表現における……探求と充足」(search and fulfillment, . . . in the aesthetic expression itself of lack of desire, 221)であると捉える。ロレンスの目的は、これまた期待とその裏切りからなる「幻滅の旅」をドラマ化することである。大いなる希望を抱いて——「新しいエルサレム」の希望を持って——サルデニアへとやってくるロレンスだが、それらの希望はことごとく失望に終わる。旅の厳しい環境のなかにある自らの姿を赤裸々に、なかば自虐的に描くという特異な部分に注目しながらも、Gendronはそうした「自己暴露」(self-revelation)の意味を、「弱さの告白」あるいは「疎外のドラマ化」であると解している。サルデニアを、現実の「無秩序」(disorder)から

逃れる場所であったり、旅人自らの「満たされない自己」に直面する場所として捉えるGendronには、「期待と幻滅」という『海とサルデニア』に特徴的な「両極性」(polarities)も、『海とサルデニア』というテキストの中で美的パターンを構成するような、「逃亡のリズムを表現する用語」でしかないのである。

『海とサルデニア』に登場するカーニヴァルなどの“play”(劇、遊び)の要素に着目して論じたのはMara Kalninsである。ホイジンガーの“play”の概念を援用しながら、現実世界とは別の、一時的で特別な空間としてplayの時空を捉え、それを日常からの解放としての旅の行為にも当てはめようとしているのである。Kalninsは共同体と個人との関係に着目し、カーニヴァルに参加することを、健全な個人と共同体との関わりであると述べる。この視点から、カリアリの場面ではカーニヴァルに対してまだ距離を保っていて客観的である旅人口レンスは、ヌオーロでの「ストリート仮面劇」にはより親しみを憶えるようになっており、そして最後のパレルモの人形芝居の場面に至って、たとえ一時的にせよ劇の世界を理解し、共同体と融合することに成功している、という解釈をおこなっている。パレルモ人形芝居の解釈においては、女性性への反発の結果として作り上げられた男性同士の世界という従来からの解釈を一步進めようと、ユング流のシンボルや神話解釈を取り入れ、シンボリカルな儀式への参入を通して個人と共同体との融合が演出されていると述べている。明らかに現実世界から遊離した劇・カーニヴァル空間に議論を集中することにより、Kalninsの議論も現実のサルデニアやシチリア(イタリア)との関係を見据えたものというより、シンボリカルなレベルでの審美的な評価・読みへと限りなく接近していくように思われてならない。

このような美的・修辞的読みを、少なくとも『海とサルデニア』批評史において、一つの極にまで推し進めたように思われるのはJack Stewartである。Stewartは口レンスの旅行記における修辞構造の分析を通して、

テキストにみられる「空間と動き」の表現の特徴を解明しようとした。この点については後の議論であらためて触れることになるのでここでの詳述は控えるが、Stewartはいくつかの修辞法、特にメトニミーやシネクドク的な手法がいかにか効果的に異郷の空間表現や旅の動きの表現に適用されているかを詳細に論じている。

極めて簡略であるが、『海とサルデニア』批評を概観してみた。20世紀初頭というある特定の時代に生産されたテキストであるにもかかわらず、そうした時代背景との相互関係を探るような読みはまれで、むしろ歴史を超越したかのような美的な読みへの集中が多いことは、殊に昨今の批評状況に鑑みれば驚きと言えるかもしれない。この時代のテキストであればすべてコロニアルの問題とすべて結び付けた読みをしなければならないということは、もちろんない。しかし、こうした『海とサルデニア』批評史の特徴が見られるからこそ、小論はあえてそれをコロニアル言説として読みうる可能性を詰めてみようという試みである。それはロレンスをコロニアリストにおとしめることを目的とするのではなく、テキストの読みの可能性を別の方向へも開き、作者が意識的にしろ無意識にしろ、生産されたテキストはその時代の歴史文脈から全く自由ではないことが示されるのではないかと期待するからである。

サルデニアを差異化する

「オリエンタリズム」などに見られるコロニアル言説に特徴的な常套手段では、前節でも若干見たように、ある集団——多くの場合、非ヨーロッパ——を他者として定立するために、語り表象する主体の視点から二項対立的にその他者が差異化される。本節では『海とサルデニア』に見られる差異化の様相を見てみることにしたい。まずテキストの冒頭、旅人が行き先にサルデニアを選ぶ理由を述べた部分を見てみよう。

Where then? Spain or Sardinia. Spain or Sardinia. Sardinia, which is like nowhere. Sardinia, which has no history, no date, no race, no offering. Let it be Sardinia. They say neither Romans nor Phoenicians, Greeks nor Arabs ever subdued Sardinia. It lies outside; outside the circuit of civilisation. Like the Basque lands. Sure enough, it is Italian now, with its railways and its motor-omnibuses. But there is an uncaptured Sardinia still. It lies within the net of this European civilisation, but it isn't landed yet. (9)

冒頭からコロニアル言説としての読みを誘発するような文章である。サルデニアは地政学上はヨーロッパに属しながらも、未踏であり、ヨーロッパ文明の「外側」にある「空白地帯」(nowhere)のようなものとして、ヨーロッパ(少なくともイングランドを含むヨーロッパ)の他者としての差異を刻印されたものとして提示されている。

「われわれと彼らとの間には深淵が横たわっている」(“there is a gulf between oneself and them”, 88)と述べる語り手＝旅人は、サルデニア(人)の異質性を強調する。『海とサルデニア』のテキストにはこうした差異化のいくつかの局面や特徴をうかがうことができる。差異化することでサルデニアを語り手の属する社会(イングランド、ヨーロッパ)の他者として定立し、その他者性がサルデニアの特徴として語られていくのである。同時に一方では、オリエントの表象を通して、ヨーロッパのアイデンティティが確立されていくという具合に、他者表象の過程を通して、表象する主体のアイデンティティが他者の「反転」として定立されるということも指摘されることである。

ソルゴノ(Sorgono)へ向かう列車の中で遭遇するサルデニアの男たちが「野生の動物のように」自己完結していると述べられているように、サルデニアはヨーロッパ文明に対して「野蛮」(savage)として表象される。次の引用はソルゴノ行きの列車で出会う男たちを描写したものである。

They remind me of half-wild dogs that will love and obey, but which won't be handled. They won't have their heads touched. And they won't be fondled. One can almost hear the half-savage growl. (87)

男たちは「野生」とか「野蛮」などの用語を用いてカテゴライズされる。この特徴は特定の男たちに例外的に限定されているわけではない。次の引用に見るように、車窓の風景へも投影される時、サルデニア全体を均質的に「野蛮」とカテゴライズしようとする語りの欲望が感じられる。

And cork-trees! I see curious slim oaky-looking trees that are stripped quite naked below the boughs, standing brown-ruddy, curiously distinct among the bluey grey pallor of the others. They remind me, again and again, of glowing, coffee-brown, naked aborigines of the South Seas. They have the naked suavity, skin-bare, and an intense coffee-red colour of unclothed savages. (90)

“curious(ly)”という語を繰り返すことで土地の異質性を強調しながら、それを「野蛮」へと結びつける。しかもこの風景は「南の海の裸のアボリジニ」を彷彿させるものである。南太平洋の表象にかかわるコロニアル言説との共鳴を読み取ることも可能であろう。

この他にも、野生・野蛮イメージはテキストに散見される。ヌオーロ (Nuoro) の町外れの山や谷は“wild” “unusual” “so untouched” “virgin-wild”などと形容されながら、人の手の入らない未踏の野生のイメージで語られ、したがって宿で見かける農夫たちも“The peculiar ancient loneliness of the Sardinian hills clings to them, and something stiff, static, pre-world”(136)というように、彼らにまわりつくのは「独特の太古の孤独」とか「前世界」のイメージなのである。又、テラノーヴァ (Terranova)

へ向かう途中のオロセイ（Orosei）の町に関しても、“savage, dark-bushes” (149)という形容が見られる。

以上見てきたように、サルデニアを未開や野蛮のイメージで描くことは、テキストの冒頭部分を検証しながら確認したように、この土地をヨーロッパ文明の外にあるものとして表象するための方法にほかならない。つまり、「文明化の階段」という尺度を用いて、サルデニアをヨーロッパがたどってきた文明化のプロセスにおける過去の存在として差異化・他者化して表象していることになる。

ヨーロッパの「現在性」に対して、このようにサルデニアを「過去」として表象する戦略に関しては、テキストではいくつかのパターンが見られる。サルデニアは、時には18世紀的口マン主義的イタリアに対比して「ケルト的」と規定されたり（72頁参照）。既述したように、「古代」、「前世界的／世界以前」（ancient, pre-world, 136）であったり、また「中世」に結び付けられる町もある（149頁参照）。このように、ある特定の過去に限定されることはないが、「現在」ではない過去の時代——あるいは空間——としてサルデニアを表象しようとする傾向が常にこの語りにはある。

一見関係のないようなエピソード——たとえば、サルデニアのマラリアについての短い言及（85参照）——なども、ヨーロッパ文明が克服してきたものに今なお直面しているサルデニアの後進性を暗示するという意味で、コロニアル言説を構成する要素となっていると言えるだろう。

『海とサルデニア』の語りは、このように時間的な戦略のみならず、地理的・空間的にもサルデニアを差異化している。冒頭の引用で旅の目的に言及した時にみたように、サルデニアは（ヨーロッパの）「外側に横たわって」といってとされていた。こうした語り手の期待——思い込みや先入観——は実際に到着後もたびたび確認され補強されている。はじめに訪れるカリアリ（Caligali）に到着後、丘の上から見下ろすのは「不思議な

風景」(strange, strange landscape)であり、この世の果てのような場所である(as if here the world left off, 57)。イングランド、ヨーロッパという「中心」に対して「周辺」としてのサルデニアが描き出されるのだ。

『海とサルデニア』の美的戦略

『海とサルデニア』を論じる時に審美的視点からの論考が多いことは、批評史を瞥見した第 節で指摘した。本稿ではこのような論評を誘発すること自体を『海とサルデニア』の特徴のひとつとして一方に見据えながらも、こうしたテキストの美的戦略をコロニアル言説との関連においてとらえてみようとしている。この作業を行なうにあたって本節では、ジャーナリズム、行政文書、旅行記におけるコロニアル言説の分析を行っているDavid Spurrが *The Rhetoric of Empire* (1993) において提示しているフレームワークを参考にしたいと思う。

従来、伝統的な西洋的理想を表現するものとして研究対象となってきた文学作品も、文化研究におけるパラダイム・シフトのなかで、そのような理想や理念が植民地主義の歴史的プロセスに関与し奉仕するあり様を示す証拠として読むことが可能であると述べるSpurrは、他文化について書くことと、他者についての知の生産との関係に注目する。コロニアル言説の特徴や戦略を分析するにあたりSpurrはいくつかの修辞上のレトリックを取り上げて、それらを検討の視点として用いている。ここで小論に有用と思われるそのいくつかを概観しながら整理してみたい。

まず、“surveillance”(「監視」)というレトリックがある。ここでSpurrはフーコーの権力論などを援用しながら、「見ること/視線」の持つ権力について論じる。空間をアレンジし秩序だてる力は、視覚芸術に必須であるパノラマ的視点に特徴的なものである。未知のものを空間に配置することは、観察者による支配につながる。このような視線の持つ

政治性についてSpurrは次のように述べている。

The gaze is never innocent or pure, never free of mediation by motives which may be judged noble or otherwise. The writer's eye is always in some sense colonizing the landscape, mastering and portioning, fixing zones and poles, arranging and deepening the scene as the object of desire. (27)

Spurrは作家や芸術家の視線は中立ではありえないと言っている。そこに主観的判断が介入することは避けられず、作家の目を見るものをある意味で「植民地化する」(colonize)。それは風景を欲望の対象として見るような視線なのである。

第2のレトリックは“appropriation”(「領有」)である。つまり、「見た」風景の所有や利用を要求するような言説。領有の過程における特徴のひとつとして、コロニアル言説は当然の所有権や相続権を主張し確立するために、未知で野性的な土地や風景を(植民者に)「身近な」(familiar)ものに翻訳するという。混乱し、無秩序で、見慣れない植民地の土地を、本国の秩序に置きなおして提示する傾向が見られるのだ。そこには「非西洋世界を[植民者の]西洋というヴィジョンへと領有しようとする欲望」(41)があるとSpurrはいう。

次に取り上げられているのは“aestheticization”(「審美化」)というレトリックである。対象を美的に提示することにより、オーディエンスと描かれた現実との間に距離を作り出し確保することにより、植民地の苦悩などの現実を抑圧しようとする戦略である。このような審美的視点は、権力と特権を有した者のみに可能であるとSpurrは述べている。

さらに彼は続けて、文明化や近代化の進展の程度によって人類や民族をヒエラルキー的に「分類」というレトリック戦略や、植民地社会の特徴を「墮落」(debasement)としてとらえ、否定的な特徴——腐敗、

不潔、性的混乱、無秩序など——を付与していくようなレトリックについても論じている。

Spurrの議論を概観したところで、ふたたび『海とサルデニア』に目を向けてみたい。テキストを包括的に吟味するには紙面も限られているので、ここでは『海とサルデニア』批評のひとつの到達点として、従来の議論のひとつ——具体的にはStewartの論文——で取り上げられていた部分に着目し、そこに絞って検討してみることにしたい。

Stewartがロレンスの旅行記における動きや空間表現とレトリックの関係を考察しているということはすでに第 3 節で指摘した通りである。メトニミー的表現法によって「動き」が演出されているとしてStewartが『海とサルデニア』の中で論じている箇所のひとつはソルゴノでの場面である。「メトニミー的動きは次々と対象に焦点を移し、共通のフレームの中で違いや類似点を明らかにする」(160)とStewartは述べ、『海とサルデニア』からの例として次の部分を引用している。

It was cold, and evening was falling into dusk. Down the high-road came wild half-ragged men on ponies, in all degrees of costume and not-costume: came four wide-eyed cows stepping downhill round the corner, and three delicate, beautiful merino sheep which stared at us with their prominent, gold-curious eyes: came an ancient, ancient man with a stick: came a stout-chested peasant carrying a long wood-pole: came a straggle of alert and triumphant goats, long-horned, long-haired, jingling their bells. Everybody greeted us hesitatingly. And everything came to a halt at the Risveglio corner, while the men had a nip. (95)

「来る」(came)という動詞の主体として並置される「子馬に乗った男たち」、「4頭の牛」などがメトニミカルに配され、「すべてが休止する」(every-

thing came to a halt) 時、この場面はシンメトリカルに閉じられる、と Stewart はその美的特徴を説明する。

Stewart の精緻な読みによって明らかにされているテキストのレトリックを、小論で検討しているようなコロニアル言説による空間アレンジという視点から見るとどうであろうか。確かに Stewart が言うように、この場面ではいくつかの人や物の動きが整然と並置され、最後の一文に収束し、あたかも一服の絵のように秩序だてて閉じられていると、その美的側面を論じることは可能であろう。しかしながら、審美的側面とは違った視点からの解釈にも、テキストはその可能性を閉ざしてはいないのではないだろうか。もっとも、確かに、空間のアレンジという側面のみからこれをコロニアル言説とみなしてしまうのは早計であるかもしれない。そこで場面の前後に少し目を向けてみたい。

この場面はテキスト第 5 章で描かれるソルゴノの町のものである。この章の前半、すでに本稿でも触れたように、ソルゴノ到着前の列車の中で旅人は魅力的な男たちに出会う。旅人は男たちに魅了されるのだが、到着した町には失望させられてしまう。したがって、この章は、サルデニアに対する旅人の期待と失望の繰り返しという、『海とサルデニア』テキストの特徴のひとつを示す代表例としてしばしば論じられてきた。

ソルゴノへの旅は「サルデニアの核心への」(84) 旅である、と語り手 = 旅人は言う。前節でも述べたように、まずソルゴノは「差異化」される。「現地の人はマラリアを認めたがらないが」、「マラリアはサルデニアの高いところまでやってきている」(85) と言うように、旅人はそこをいまだマラリアが発生するような土地としてとらえている。男たちの異質さについては既に述べたように、旅人は、「われわれと彼らの間には大きな溝が横たわって」いたという感想を述べていた。「奇妙な」コルクの木が「アボリジニ」になぞらえて描写されていたことも想起したい。

一方で、この差異の現場は混乱と不潔に貫かれてもいる。ソルゴノへ

向かう列車の中では、「普通の人間には全く出せないような、まことに奇妙で、不自然で、甲高い金切り声」(91)を発する農夫へと注意が喚起され、実際町に到着する前から、ソルゴノの不快を伴う混乱と異質さが予示されているかのようだ。到着した駅で、宿を案内する男は「ぼろぎれ」(rag)と形容され、当の宿の様子も惨澹を極める。バーは“dreary”で、「エスキモーのような」主人もまた「おぞましい」(dreary)ようすであり、シャツに「ワインのしみ」を残し、「顔も洗っていない」ようだ。旅人は「汚らしい格好の彼を即座に嫌になった」(92)。つづいて通される廊下もベッドルームも“dreary”“hopeless”“dirty”“repulsive”などと形容されるように、「目をそむけたくなるような汚さ」(93)なのである。

外へ出ても同じだ。町の様子は、「おぞましい場所だ！冷たく、希望も生命もない土曜日の午後。うんざりするような村で、ひどくむさ苦しい」(93)。さらに道を上っていくと、名ばかりの「公衆トイレ」が悪臭を放っている。旅人は腹が立ってくる。そして一刻も早くそこから去りたいと思う。

To get out at any price! So we scrambled up the steep earthen banks to a stubble field above. And by this time I was in a great rage. (94)

この状態で旅人は高台にやってくる。そしてそこから「ソドムのりんご」のような町を見下ろすのだ。日が暮れかかった村の家々からは「青い木の煙」(blue wood smoke)が立ちのぼっている。その様子は「夕暮れのウエスト・カントリー」のように見える。そして宿へ帰ることとなり、先ほどのStewartの引用の場面へとつながるのである。

Spurrによるコロニアル言説の特徴／レトリックに則して整理するならば、引用の場面へと続く一連の語りにおいて、語り手＝旅人は、サルデニアを未知のものとして周到に差異化し、そこを混乱した無秩序状態で、

不快なところ、不潔なところへとおとしめるかのように描く。その上でこの混乱状況に秩序を与えるべく、自らが慣れ親しんだもの——イングランド、ハーディ・カントリー、ウエスト・カントリーなど——へとその風景を翻訳して自らのものとし、所有権を主張しているのである。この延長線上にあの整然と切り取られたかのような、引用に示した空間描写があるのだ。この場面をコロニアル言説にひきつけることは、あながち強引とは言えない。したがってこれを単に美的に整理された風景としてだけではなく、そこに、サルデニアをアレンジして所有しようとするまなざしが有する権力の存在を読み取ることも可能であろう。

旅人のコロニアル的発言はここで収束してしまうことはない。彼は次のような発言をしている。

I cursed the degenerate aborigines, the dirty-breasted host who *dared* to keep such an inn, the sordid villagers who had the baseness to squat their beastly human nastiness in this upland valley. (96)

村人の不潔さに嫌悪感をむき出しにし、彼らを“degenerate aborigines”と呼ぶ語り手の言語は、もはや、自身の優位性を信じて疑わず、他者の支配に乗り出そうという企図に満ちた者（＝植民者）の言語と区別がつきがたいものとなっている。

表象の対象をレトリカルに支配するために、観察した情景や空間に秩序を与えるべくそれをアレンジしようとする他の方法として『海とサルデニア』で特徴的なのは、対象を一幅の風景（画）と見たて表象する方法である。典型的なのは、移動の途中で旅人＝語り手が見る車窓の風景であろう。そこで旅人は何度か、土地で働く農夫の姿を描いている。ひとつの例を取り上げてみたい。次の引用はマンダス（Mandas）へ向かう車窓の風景である。少し長いが引用してみる。

But soon as we begin to climb to the hills. And soon the cultivation begins to be intermittent. Extraordinary how the heathy, moor-like hills come near the sea: extraordinary how scrubby and uninhabited the great spaces of Sardinia are. It is wild, with heath and arbutus scrub and a sort of myrtle, breast-high. Sometimes one sees a few head of cattle. And then again come the greyish arable-patches, where the corn is grown. It is like Cornwall, like the Land's End region. Here and there, in the distance, are the peasants working on the lonely landscape. Sometimes it is one man alone in the distance, showing so vividly in his black-and-white costume, small and far-off like a solitary magpie, and curiously distinct. All the strange magic of Sardinia is in this sight. Among the low, moor-like hills, away in a hollow of the wide landscape one solitary figure, small but vivid black-and-white, working alone, as if eternally. There are patches and hollows of grey arable land, good for corn. Sardinia was once a great granary.

(71)

語り手は「サルデニアの不思議な魔法のすべてがこの光景のなかにある」と述べている。遠景で働く農夫の姿である。この風景はまず「並々ならない」(extraordinary)と繰り返し形容することで、その異質さが強調された後に、一方ではまだ人の手があまり入らず所有されていないものとしても表象される(uninhabited, wild)。語り手はこのような土地を「コーンウォールのような」と形容し、自らにも把握可能なものとして提示しようとする。しかるのちに、「サルデニアの魔法」とされる光景が提示される。それはこれ以外の場面でも旅人が再三にわたり注目し、こだわっている「白黒の衣装」(costume)を身につけた農夫の姿である。それは「あたかも永遠であるかのように」、すなわち時間の変化から引き離された姿である。また語り手にとって、理想的な風景の中のサルデニア

の農夫は集団であってはならず、「孤立」(solitary)していなければならない。引用の直後で、現代イタリア人との対比を試みながら、カーキ色の服という単一でおそろいの服に象徴されるようなイタリア的デモクラシーによって個性が抑圧されていないサルデニアを示そうとする語り手にとって、彼の理想とするサルデニア人とは「衣装」を着た単独の農夫でなければならないのであろう。

このようにサルデニアの風景は、語り手の趣向に合うように、その空間がアレンジされて提示されている。風景を見る主体である旅人＝語り手によりレトリカルに支配され所有されたサルデニアの姿をわれわれは読み取ることができるのだ。一見、美的整理・表象とみられる部分にも、支配の欲望や権力のまなざしを読み取ることも可能である。

美的戦略の効果 ― 隠蔽・抑圧されるもの ―

小論ではこれまで『海とサルデニア』のテキストをコロニアル言説として読みうる可能性を追求しながらサルデニア表象の特徴を見てきた。そこではサルデニアは「過去」として差異化され、また語り手＝旅人の視線によりサルデニアの風物は「美的に」整理・配置して表象される傾向にあった。そこに表象する主体が対象を支配しようとする欲望を読み取ることの可能性を指摘してきた。このことは表象される側から見ると、サルデニアの主体性が否定・抑圧されることにほかならない。過去に釘付けにされた姿こそが「真正な」姿であるといわんばかりに提示され、かつサルデニアはイギリス人旅行者の言葉にいわば「翻訳して」提示されることにより、サルデニアの現実には根を下ろしているであろう社会・政治・経済的なものから焦点はずらされ、サルデニアの変化や成長の可能性は抑圧・隠蔽されるのである。本節では、このサルデニアの主体性の表現をもう少しテキストの探る作業をして、コロニアル言説と

しての読みを補強してみたい。

サルデニアは自らの声を発する機会を与えられているだろうか。まずこの点を検証してみたい。そもそもの前提として、テキストが旅行記という形態である以上、基本的にサルデニアは描写の対象なのであるから、自らが語る機会は制限されざるをえない。その上、たとえサルデニア人がテキストの中で積極的に声を発しているとしても、それはすべて語りのフレームワークの中で生起していることとして、サルデニア側からの声を主体的な発話として考えることは困難である、という議論も成り立つかもしれない。ここでは後者のような極端な立場はとらないが、それでもやはりサルデニアの主体的な声が抑圧されているような様子は探ることができるのではないだろうか。

これは間接的な論理になるのだが、ひとつには、語り手＝旅人は、表象するが、逆に表象されることを嫌うという点を指摘できるだろう。語り表象する主体である語り手＝旅人は当然ながら様々なものに目を向け観察していく。逆にその語り手自身は、見られたり評価されたりすることを嫌うのである。そこにサルデニアの主体性に関する語り手の処理の仕方、あるいはテキストの戦略を伺うことができるであろう。

「男たちはいくつかのグループになって立っていた。しかしそこには通り掛かりの者を決してひとりにはしておかない、あの親密でイタリア的な注意深さ（watchfulness）はない」（56）と旅人は人々を観察しているが、同時にそこにはサルデニアに到着後すぐから、人々の視線を気にしている旅人の様子をうかがうことができる。

視線を気にするだけにとどまらず、見られ、評価されることを嫌う旅人の姿を指摘することも可能だ。ここで取り上げる場面／エピソードは、類似したかたちで旅の前半と後半にも登場してくるもので、旅のひとつの基調を形成しているようにも思われて印象的な挿話である。第一の場面は、まだサルデニアに到着する前の船の上でおこる。旅人に話しかけ

てくる船員は戦後イタリアでの石炭不足を話題にする。そして、持てる国イングランドやアメリカとの経済的格差を嘆く。

The coal — *il carbone*! I knew we were in for it. England — *l'Inghilterra* she has the coal. And what does she do? She sells it very dear. Particularly to Italy. Italy won the war and now can't even have coal. Because why! The price. The exchange! *il cambio*. Now I am doubly in for it. Two countries had been able to keep their money high — England and America. The English sovereign — *la sterlina* — and the American dollar — *sa*, these were money. The English and The American flocked to Italy, with their *sterline* and their *dollari*, and they bought what they wanted for nothing. Ecco! Whereas we poor Italians — we are in a state of ruination — proper ruination. The allies, etc. etc.

I am so used to it — I am so wearily used to it. I can't walk a stride without having this wretched *cambio*, the exchange, thrown at my head. And this with an injured petulant spitefulness which turns my blood. For I assure them, whatever I have in Italy I pay for: and I am not England. I am not the British Isles on two legs.

.....

My God, I felt I could not stand it another second. To sit above the foam and have this miserable creature stuffing wads of chewed newspaper into my ear — no, I could not bear it. In Italy, there is no escape. Say two words, and the individual starts chewing old newspaper and stuffing it into you. No escape. You become — if you are English — *l'Inghilterra*, *il carbone*, and *il cambio*; and as England, coal and exchange you are treated. It is more than useless to try to be human about it. You are a State usury system, a coal fiend and an Exchange thief. Every Englishman has

disappeared into this triple abstraction, in the eyes of the Italian, of the proletariat particularly. (50)

ここの旅人は、イタリア人により評価されること、あるいはレッテルを貼られることにひどく苛立ちを見せている。なるほど個人としての評価を差し置いて、「イングランド」、「石炭」、「為替」などとして抽象化されることに立腹する旅人の心情は一定理解できるものだが、イタリア（サルデニア）を自らに身近な言語を用いて「エスキモー」、「ハーディ・カントリー」、「ケルト的」、「コーン・ウォール」、「アボリジニ」、「ロチェスター」、「ハムレット」、「異教徒」（116）などと表現することになる自らの傾向が振り返られることはない。

旅の後半の場面でも似たような経験をする。旅人の出身地がイギリス（ロンドン）であることがわかると、称賛に近いような態度をとる地元民に接して、彼は次のように述べる。

I turn out to be *l'Inghilterra*. I might as well be a place on a map, or a piece of goods with a trade-mark. So little perception of the actual me! so much going by labels! I now could have kicked him harder. (158)

ここでも生身の現実の姿（actual me!）は省みられることはなく、物が地名のようにラベルを貼られることに対する苛立ちや嫌悪感をあらわにしている。旅人は評価・表象する主体であって、みずからがその対象となることをひどく嫌うのである。

一方でこれらのイタリア／サルデニアの人々が経済用語を用いるのには理由がある。これら場面の前後では、経済大国としてのイギリス、逆に経済状況がおもしろくないイタリアのことが話題になっていたり、イタリアを離れてアメリカやイギリスで働きたいというイタリア人のこと

が語られている。経済問題は現実のイタリア／サルデニアにとっては重大で深刻な問題なのだ。ところが旅人はこのような現実問題に注目することなく目をつぶろうとするかのように不快な態度を示す。評価し表象する主体の特権はあくまでも自分の側にとどめようとし、差し迫った経済・社会的要素を抑圧することによりサルデニア／イタリアから現実的意味を剥奪していると読むことも可能になる。変化が起きつつある現実には目をつぶり、理想の過去の美しい姿を「真正の」サルデニアとして表象しようとする語りの性格が指摘されるべきであろう。

主体的に働きかけるということは、言葉を変えれば、成長・変化していく可能性を有するということでもあるだろう。変化のベクトルの向きは過去というよりむしろ未来である。ところが、こうした成長や変化の可能性は『海とサルデニア』の語りにおいてはしばしば抑圧され否定される。

ロレンスは生涯を通して近代批判を展開したとよく言われる。この特徴は『海とサルデニア』にも散見することができる。すでに小論でも何度が触れてきたが、サルデニア人の特異性を、われわれと彼らとの間に横たわる「溝」(gulf)と述べた後で、語り手はサルデニア人には近代(ヨーロッパ)に特有の「受難」すなわち「普遍の意識」がないと述べる(88参照)。すぐ後で、「啓蒙主義と世界の単一化の最後の波は彼らの上にも打ち寄せて、靴下帽を流し去ってしまうのだろうか」(88)と自問する語り手の中では、近代の「普遍の意識」は、文明による「啓蒙」そして「世界の単一化」(world-unity)とつながっている。語り手はこの「単一化」を、調和へ向かうポジティブな動きというよりも、個性が抑圧されてしまう「均質化」(homogeneity, 89)の動きとしてとらえている。少し前に語られる次のような認識とつながっているのだ。

It is symbolic of the universal grey mist that has come over men, the extinguishing of all bright individuality, the blotting out of all wild singleness. Oh democracy! oh khaki democracy! (71)

本来サルデニアにはなかった近代の所産、すなわち個を圧縮するかのよう
な不気味な均質化へと向かう傾向に対して眉をひそめ、サルデニアでも
見つけてしまったカーキ色の服に身を包み、個性をなくしてしまったよ
うな人々を見て「カーキ・デモクラシー」と揶揄しているのだ。

ロレンス自身の ― および彼を取り巻く ― 言説の中では、こうした
表象はロレンスの近代批判の言説として解釈されよう。ヨーロッパの外
側に位置すると期待してやってきたサルデニアにもヨーロッパの近代化
が忍びこんでいる。近代に抗するものを求めるが故にサルデニア独自の
側面を追い、それを称揚していく。全体性に対する「野性的な個性性」。
カーキ色の服に対する農民の「衣装」(costume)や、男たちが頭に載せ
る独自の帽子(stocking-caps)などなど。

サルデニアに理想を求めるがあまり、語り手はサルデニアに起こりつ
つある変化を認めようとしない。サルデニアは語り手＝旅人の理想のサ
ルデニアでなければならない。ヨーロッパとは違うサルデニアでなけれ
ばならない。なるほど、サルデニアに近代の介入が認められることも事
実だったのだろう。しかし、サルデニアの近代化を批判するということ
は、変化の可能性を認めないということにもなってしまう。旅人にとっ
て好ましかろうがそうでなかろうが、自らの進むべき方向を決するサル
デニアの主体性は抑圧されてしまうのである。

おわりに

今日の文学、特にトラベルライティングの批評動向に鑑みながら、小

論では『海とサルデニア』をあえてコロニアル言説として読みうる可能性を探ってみた。そして、Spurrの議論や人類学の知見なども援用しながら、『海とサルデニア』にもコロニアル言説としての特徴が認められることを一定示すことが出来たのではないかと考えている。小論の射程はここまでである。『海とサルデニア』のテキストがコロニアルリストの言説としていかに流通し、また利用されたのか、ということを示すにはさらに突っ込んだ議論と論証が必要である。

他方で、われわれは『海とサルデニア』のテキストの中に、コロニアルリストの視線を逃れ、それを脱中心化していくような一面も見出すことができる。筆者はそこに『海とサルデニア』の奥深さと魅力を感じるが、これについての検証は別稿をもって臨まねばならない。

批評史を概観した際に、本テキストがある特定の読まれ方をされる、あるいはされない、という傾向を確認できたが、この問題は一方で、作者の特徴を考える上では非常に興味深い事例を提供しているのかもしれない。繰り返しになるが、小論ではあえてこうした従来からの特徴的な読みをしてこなかった。ポストコロニアルの状況を文学批評の内外で意識しなければならない時点にいるわれわれにとって、ロレンスという作家のひとつの旅行記を、現在の視点から読むことの意味、あるいはその可能性に少しでも迫ってみたいと考えたからである。こうした読みの可能性を広げることは、結果的にはあらたなロレンス像を見出していくことにもつながっていくのではないだろうか。

参考文献

- Burgess, Anthony. *Flame into Being*. London: Abacus Books, 1985.
- Carr, Helen. "Modernism and Travel." Eds. Peter Hulme and Tim Youngs. *Travel Writing*. Cambridge: CUP, 2002.
- Dissanayake, Wimal & Carmen Wickramagamage. *Self and Colonial Desire*. Peter Lang Publishing, 1993.

- Ellis, David. "Reading Lawrence: The Case of *Sea and Sardinia*." *D. H. Lawrence Review*. Vol. 10, No. 1, 1977.
- . "Here and Now in Sardinia: the Art of Lawrence's Travel Writing." Eds. David Ellis and Howard Mills. *D.H. Lawrence's Non-Fiction*. Cambridge: CUP, 1988.
- Fasick, Laura. "Female Power, Male Comradeship, and the Rejection of the Female in Lawrence's *Twilight in Italy, Sea and Sardinia, and Etruscan Places*." *D. H. Lawrence Review*. Vol. 21, No. 1, 1989.
- Fussell, Paul. *Abroad*. Oxford: OUP, 1980.
- Gendron, Charisse. "*Sea and Sardinia*: Voyage of the Post-Romantics Imagination." *D. H. Lawrence Review*. Vol. 15, No. 3, 1982.
- Janik, Ivan Del. *The Curve of Return: D. H. Lawrence's Travel Book*. British Columbia: ELS Monograph Series No. 22, 1981.
- Joost, Nicholas, & Alvin Sullivan. *D. H. Lawrence and the Dial*. Carbondale & Edwardsville: Southern Illinois Univ. Press, 1970.
- Kalnins, Mara. "Play and Carnival in *Sea and Sardinia*." Eds. George Donaldson and Mara Kalnins. *D. H. Lawrence in Italy and England*. London: Macmillan, 1999.
- Lawrence, D.H. *Sea and Sardinia*. 1923; Cambridge: CUP, 1997.
- ルーンバ, アーニャ. 『ポストコロニアル理論入門』. 吉原ゆかり訳. 松柏社, 2001.
- 正木恒夫. 『植民地幻想』. みすず書房, 1995.
- Meyers, J. *D. H. Lawrence and the Experience of Italy*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982.
- Musgrove, Brian. "Travel and Unsettlement: Freud on Vacation." Ed. S. Clark. *Travel Writing and Empire*. London & New York: Zed Books, 1999.
- Nehls, Edward. "D. H. Lawrence: the Spirit of Place." Eds. Frederick J. Hoffman and Harry T. Moore. *The Achievement of D. H. Lawrence*. Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1953.
- 太田好信. 『トランスポジションの思想』. 世界思想社, 1998.
- . 『民族誌的近代への介入』. 人文書院, 2001.
- サイード, E. W. 『オリエンタリズム』. 今沢紀子訳. 平凡社, 1993.

Spurr, David. *The Rhetoric of Empire*. Durham and London: Duke Univ. Press, 1993.

Stewart, Jack. "Movement, Space and Rhetoric in Lawrence's Travel Writing."
Eds. Keith Cushman & Earl G. Ingersoll. *D. H. Lawrence: New Worlds*.
Fairleigh Dickinson Univ. Press, 2003.

鈴木, テッサ = モーリス. 『辺境から眺める』. みすず書房, 2000.

Tracy, Jr., Billy T. *D. H. Lawrence and the Literature of Travel*. Ann Arbor:
UMI Research Press, 1983.

Young, Robert J.C. *Colonial Desire*. London and New York: Routledge, 1995.